湖月抄

きりつぼ

895
.M6K5

Freer Gallery of Art
Washington D. C.

7152

幻　細　巻名以哥号之　河　大空をかよふまぼろし夢にだに
見えこぬ玉の行末たづねよ。まぼろしとは　孟　幻術をするものを云なり。
変化して虚空に飛をかけり川などをわたるをいふなり。是按此方
ハ源氏君唐の玄宗をとろへてかの玄宗皇帝の後に方士道
士幻術をもちて楊貴妃の魂魄を求めしをおもひてかくいへり。
まぼろしと。幻ハ説文相詐惑也。増韻妖術也。即今呑刀吐火植瓜
種木之術皆是也　細　源五十二歳の正月より十二月までを
のせたり。くまなく紫上をわすれがたき心月々にしるし入ま
るさまをかきあらはせり。出家なとおもふよし　孟同意　花鳥に意
ハ源の四十八の年生迄何くれとしハ五十二歳に成給へし

春の光をと　細　何となく物憂
春まで物こしよりはわかくさ
まれたる我ぞよふり行の
心あり師春を迎えて
も此思のおもひまさり
ぞしくりちとりさ
つぼり春にてハふ人の
心るかべし又紫上ハ春
心をよせ給ふ故に源の御
石如くみえたし
とこまハきはめの　細　此法聖
みえる女がさみぞおもし
まれとおもひ緑くるふ
さ見ど　ハまつとこまふ
お源の御へくおのにて書
らかとけふうしつまて
とも雨くへくびなまって
つかやどにて　細　春をまうて
まほしていり　孟　熱湯ね
まい花をまもゝる志めぬう
とくし師春をぬすれ花を
殺し紫上のうれをのひする
とまよそこめくのこなえ
春をとめて　細　源へをかうき

春の光を見給ふにつけても　源云　いとゞくれ
まどひたるやうにのみ御心ひとつは
かなしさのあらたまるべくもあるを　孟　年始とて人々参られと対面なき
外には例のやうに人々まゐり
給ひなどすれど　或本悩ましき　御心ちなやましきさ
まにもてなし給ひて、みすのうちにのみおはします
兵部卿の宮わたり給へるにぞ　細　蛍
たゞうちとけたるかたにて対面し給はん　孟　此詞にて詠みて対面あるべき
とて、御せうそこきこえ給ふ

源　わが宿は花もてはやす人もなし
なにゝか春のたづねきつらん

宮、うちなみだぐみ給ひて
蛍　香をとめてきつるかひなくおほかたの

めんどうな事でござるが源
の字かくいふ事といふハ皿大
きこの花をみんとて参り
しかやうに打わたせと源
の氏の名を持つてまへに
この歌え
これらの事によりてやむべき
人三源の寺に花をまて
やとへりけるとこの頃へ
源にて白く鶯がうりへとそ
其やまそてさへやと定
法にくりける
細川のかの人々勝負
いさめるかし　五音
久しうつらきかうて
こころ見勝をかうしめ
うくらし
ときれるく　細　源の支韻
ある花歌はんして大きを
かんまつりしもるをどるべき
めまじうし
うしはすめやうる[illegible]
皿　源の事をうけられ
しらんくことよりかし

のくさりしいひやるまじ[illegible]細
さまかくえ出しまつる源の事[illegible]
しきるぞられよりおまこうやもぐ
人すくやさくしまへる花ハ月のうる記
けさうしつておりしらぬのかわひるう[illegible]
わそびりけくれいはうくりしらう[illegible]
うらへ女房あじらもそしほへよりうハ墨源の
多からかやうめくさらうへ[illegible]すことわし
めぐらくあひさ海もへき世ありてひさ[illegible]
ゆるよしうえて流さくかさとまうり給ハ
どもらぞれすさ諸りとあずさあゆくと
まつりかうるしはまあやうま流くらく

りけくるれをおえ　紫式部
お引ぬえくするつるそめる
二八歳にうくらもるかし
かくこさけ　細　右の字清濁
紅葉おう濁らしむ時ハ
源のつさのよう引きかうく
源ハむ時にし遊ぶると
多級しらし下関し
こうとわりたろゆしき
細源よのハみさりあひ
しうとうち花中比葉
上いかさ物から時
女三之宮勝月夜かとり
からきりりまかとく

めてたすどいわくぞうしていどは時じいら
こくるすさめやうにお打しさりつる人へ
とも中くりうさびしうこ流ひこうりねよるう
ていし物かぞくうよりそてまするそてびる
の流しの名ありまじくにゝちうしれとおもうし
物あしのかくうりひきさうげつくこかく
すふつれじくあうくのしよいかりへの御流
しい海ふおりくりわかり名稀すさ流ひ
ぞう心のふうくわうりもりよつけてもさう
わうろ川ありうりきうつるよつけて中
ごろ物うしめしう物がしるう気色の[illegible]
こし給しるじ代花しめ出しるよあいてうか

わのくさうしあらそふかな
紫上の心をさぐりまひし
ことゞもを今少しあそへん
くさありしし
入道の宮　細 女五宮之君達
きこよ桜織く雪しばらくじ

さへみくも、みまめやうまらぐるしきこえ　おそへ八女五宮のみやハ
つれなくおぼゆるかなとこゝしうならるゝ。
あまりにをかしとも、らうかくしく世々せしは　紫上のうへ
かくしへるまうか人のさまさんぞもいとよ
くゝさへりまひあぐしう宮へて給ひとく　細 槿斎院朧月夜尚侍のこと
いるゝらしのに、ひとまへりづらいかめ
らんとそしんに、ぞうしゝしよすこし
まてきこゆるゝりまひゝんとの、いとお
しうゝやしうあがらし給さ夜もしょう　河 奉る表 腹に
とあらうらし給そのあらのくしろ　とりあへて　細 さぶらふやうに
ゆそうともえう、雨もちうくつまきる
人ぐいかのくめし出つまはり入道の宮

まひ明のくさし　宇綾つお
紫上をまもふ女三宮となんとも
て給くの三ケ日夜雪より
そうし暁くつゝまゐる
れうしは紫上のまこて申れ
さうわひゞ人の袖をひき
しでもさくもちぐたち
うきて物ゝくるゝどゆする
とき今そひおほえらく

冬さでもる　細 まてるひま今
いる、これの冬なるかでい
つらしまつとみてろろん
ここ
ゆかりのおもひもくしよ
雪つもりめぐ之　細 曙子りを

のきくらうじめまつりし頃にそのゆふに
そうと、ゆめゆはかくまいらし給ひゝらしかりに　物事を　紫上の事をあげていく
しるよみれつゝわたりさるのまぐやしと、思ひあ
つりし氣色の御気まりし中にも、雪あり　血付お雪　深のしるし
さらしわろくさよ、ならやすらひて、彼方　ちゐゝとぞひおきれより
もひえ入まつりはおかしてゐのかりさつげ
しくるさしまいしそうりつうさひしらうる　紫上の事を
ゆのうし袖のいてろうさめてしまくりあ
あるとひさうくしても、めてまぐくらうし　さらぞく
あつりし程のゆうかいると、夜もとすゞゝ
冬ふも又いうえへん世をようてあかりつゞ
けしら明月のかし、もざうりしまかうし居

出入りの字はおもてうらく
こゝろえべし
俗世には　細 其こゝろは源
氏薫を経人とよびも人
めでたうりて折る也ある
うし、師 阿闍梨の心ゆえなん
とは出る心をもつりの阿の
中将はりくよ前きぬ也
山の寺などにおのれら田舎
やけあつしちぎの数を増
大坂けさいうふを 河 火補
師ばかりの後衣く火かけ
まかりの井ちくさあら
後の御くなく五蒲本大
備るよしとて御ある也
こゑく

なるべし。いとゞかゝるもつりなきけるに雲かくれ
とひみ経のうけまゝるゝてそのありぬこ
もちすゞりの流れこゝろにくのさびしさもひふ
うきすくれし
源 うき世をは雲居ふへとおもひてあそびの音
うまる心ぞ明しらか。例のまねふかひしらは
はてゝうしめしてとゞるひやふかくきしふ
火地とし。あくれは火とけまつくもて。中納言
のあゆ中ねのうつてるとばかまへらくれ物語
きこしめ。俗ねつるしらくもきひしうりつる
秋のいゝあうれ。かくてもいとふくおもひきこゆ
例へりうる世とぞとらるゝすくなくもうつし

俗のまゝしくく　細 おもくら
何らの内へなるらんれて俗
のまゝしう人いつまでくとまま
ん

こゝろさまにかされるらう
孟 源の御縁に桐壺帝
の御子にて身の行ぐいゆ
はるゝれども世のそしひかや
捨てくし

きこゆれとしらるゝなかの俗。我おもくらう捨て
はこの人ぐのいとくるしくこゝろひん人なるの。
表よりしおしふぐきるしこゝろからくしまふ。
をのびやすよからとどもるすひつて。経をてとよ
とまへるれ都をみせしろうるはしちんるまよ
てぶるに。源しるらかうしにに俗まへし。御供ぶん
をぶしこゝををさきおかへぬまで。おくられゝは御書
らうまひんでのあゝつくさをうとそうさこゝも。
細 源の御弟 この世よつけてはおのぞとよべくきこつとはき
くいえまでしうぶるときこゝ身ゆは生れるゝから。
又人もあくまくく見ゆるし。こう思ふてもおさけ
るらんれとよゝくとしぞ。世のかゝるまくう

つましさきのとらめ紙
盃 栄土遊女のかはしごれ
めしそえらうとのなさし 師説
のことへまりさうんて
まくぐせの紀とも 源の由男
の若葉のかしく
うらしのふ代さくとも
人の垢つくこのかきりを
しくふと八遺世の塩くさ
さとても苑まへまるてて
どのなく
今々人家紀でなく 栄土而
うせ夕八遊世紀ぐくらきを
又代介今て此別之忠ゆんを
内めとしのあひくしまゐは
四 拙者ども 千行更万行と
源のかすをつくれる說あり

ささきこしくぐ松かげのとをそてかへるか
するへしかれとまろそまつねかかよゐ
からかれがらく日ましの夕ちからくすなり。
いづさらしのしらめ紙とつらよもくを
の月ともいつくしのらうのこさやもあ
うくここてくろやとれよいはなる家
の月ずしすくすめかくろとうられらく
ておらしうけまめすれへくろい
まはとて時さうくれん猶くそいはま一こさ
はのむとられめ人くれいらくゝなし。
まろうろく人の猶うゐとして此めよせしの
じひくし紙よかかれきそやかんそ剃かく

さくと之字しもて 師 由君は
わう女房のきみく源の御遺
世をうかしとなくんしてう人
ぐ母しく猶うあれなさ
八之ふさそくよのとうあ
しくいらし

法源とくぞすうんへやりしてときくろめんかくさ
すくきそ折拾しれなすりかんゆられらし
さ紙とのくしら出中得しうれどさを
えせまくとむとくへつそてやさぬうくのく
ゐげきあしまつる明月の名すめくてし
まへゐ夕暮みどのさよやうゐうかりくぶ
うれなりしなへて夕は氣しさらずらし
へくと坦まへらくてゐそのれ
どしまふ中ねの気とてそうふ八まうさ
ちのさくうらこすひられしといしく遊ひ
つくとまひらくぐやありくへいっとうさ
くらつてさつはるとそしうすれしよやめく

ざりざりと。くうをまて縫ハ
わらむへいるこしまらう
ゐとじめ見えしわりし袖をし
出ゐよつけてかの江郡ハのをらあそ
哀し美しゐらくだをうくうちあとも
めるをくてうあひまつよ美てしうけ
もひさがうしかりいらくし
と思も陽もうしきへめはくうり
それ語りとて逆アあるどもむ
み流もくうくのあそうちとぞ
里あまれどいふらんし絵くし
すへはむうくん陽どそうり

さはりめならぬ垢さめんとさうふとも月湯
よ縫けよこうん身のまさ陽うくる
さひぞしとすうちてもものられ今まと
てるやまれ人後のかまへうそ見へしぞ
ほれてし今人かきこしぞあるとしれん
も出るすしこしあれどう残喜まそ
やぶしものくさうちうちもさうてき
こしのせるよそろべくうしくそはまうて
おこるらしと出ぶをば夕おねの妻あるさ
よそらへぞそくぞ対面しまひろぐこ
まわぶうう志のつるやうよ人のひつそそ
きこう陽ひをぶまよ女のしめてそそつと

わんじよくしあひつゝきこ世とゝもえさせ給
やり給ふむすめれこゝさぐくは姉みともの殿
のおつさあつまつけきハ見いとをきこゝこゝめ
宮の御かたもうちつきされハいとあはれにて
いつくしふも世かはつるゝきこ宮ハそこの
こきいのかはいしらつまもくをすて二の宮
とぞさこぐへ志さ侍りて見給おもひ
まさせしまさひかろくのみちひきみへ
とそさいの御まへの紅梅よりまさりて
ちらえおりきまつるといつ衣とそ
てまつり給きさうしまするれハ花の香
九のさうりよするまぞこゝしきよあまのふ

宮の女 細 若宮の君が
給ふ雲ゐれやさえ
ぞるさうの女とのそ
うち
きくへしさこれ宮すくさ
めぐりハ 宮の御後家の
ゆめぐさめよ句ゑめをまよ
つゝせきてそ
くの折をひしらでそ
こひの御かへの紅梅
孟おほ治ふもとありし
るしぐてまで正月の道

細 ものかたりの内の給紅の
をさなき(?)ほ
いつくさの御宮の内の宮
細 花の紅梅の二の宮そ
二宮孫(?)そのこと
細 上の道えとの給ふ
孟 そうつ二月のこと
宮仁
梅のかう添え

ゆりしう症ゐくれゐつまらの花称ゑんのこ
うちいはゞ鶯のやうるやうによるさおされハ
宮の
さらおて御ゆしんぞ
宮のみ
うちへてゝし花のおりしまするき宮にまゐ
らむそはゝめでてさるゝ鶯とゝそへふさめ
思ひなき給ひぬかく妙めまくはおまへのこと
梅つゝしへよりそうしぬとめそもふるまよ
はおりゐどもゝ川かさくわさよつゝろよ花
けそもゝをいつゝ此かるゝれハえうこの
世乃和りやうに鳶の声をさうしさらん
山のそ家康しうのといづれかまさり
まふ山みさゝうぢのくらゝしげきよ咲るれ

あめはらこゝのうち紅梅
にわりりうさへし梅
の手入らゝしれゝえ
て源らゐりて
え入てしう 三條ニ入て
へいうさ帝みも鶯の時
とこいれどさゝみや侍て
こさいの殿りとゝ申ゝ
いとく細波あらゝみみで
とこ宮流そそのるし
まつく 細 宮より六
冬花のるみく 師 宮
まさうかくく二月よら
のてしらさへし
細 宮のゝこの世乃わり
若もりくこの世乃わり 師 正親ら
づもらく給へし後
本の宮は鶯のやうま
ともるゝことのやうし
冬まのりもさこらさらん
ゆりみ鳶のゝふみまそえ
ゑ西奥山の源さふを
んいろちりん 孟こたれ
あれハ人ぶ々くもをあれ

師 れくらう年
抄 表宮底 三の花

うちつけにつゆけくのみみなさ
れ給ふ外の花ハ一重ちりて八重さく
花桜さかりすぎて樺桜ハひら
け藤ハおくれていろづきなどこそハすめ
るをそのおそくとき花の心をよくわき
て色々をつくしうへおき給ひしかバ時を
わすれずにほひミちたるに若宮まろがさ
くらはさきにけりいかでひさしくちら
さじ木のめぐりに帳をたてゝかたびらを
あげずハ風もえふきよらじとかしこう
思ひえたりとおもひてのたまふかほのい
とうつくしきにもうちゑまれ給ひぬおほふ

ばかりの袖もとめけん人よりハいとかしこう
思しよりたまへりかしなど此宮ばかり
をぞもてあそびにみたてまつり給ふ
君になれきこえん事も残りすくなしや命
といふものいましばしかゝづらふべくとも対
面ハえあるまじきなりとて例の涙ぐみ
給へれバいとものしと思して母ののたまひし事を
まがまがしうのたまふとてふしめになり
て御衣の袖をひきまさぐりなどしつゝ

細 式部卿宮の御事也
師 おほふばかりの

まとのいみあひぬるも
細 除服とちかくてあるう
の人にもちやからかきを
ばらさし
身つらしのけちよし
細 平絹のるとしとそ絹
てり忌の濃淡によりて
心喪の服ハ用るべし
河武ハ云妻服ハ一期の中
に一宿ちそて六条院
葵上の問忌に着服の義
あり何とて云てこれぞ
よし業平之着服の濃淡
忌日忌の原にてよるべし
服忌令曰本妻 嫡子生妻也
服三十日 服一年 子一生
當妻 服九日 服三月
業平ハ忌ハ妻の喪まで云

まだしらし おりすゝすゝのまるれかしらん
よろしうりて おほくの庭とも…との
しらぬとも おもしてる おほ絹女房達
どもとりのけてられいふくぬとおりけれ
いのいろあひなるもおやおどこるやうにか
いかしく 薄つらしのけるとしもいろく
よのつゐあれども しさうすやつしたし
りんとなりけれるうしひなどもいてこそ
ろそうよこしとしさきれ おびしくのころ
ばそけれあるやうなれば
今はそれかしやさえんはきさんの心とど
めしきのそきねとへやをさまらしけらし

月の服九ハ見一の妻あらし ひの服着衣をくはりのこひまれどもさ
衣ハ西服なしても若衣裳をの忌日なとはたく院も次…
の忌服にてとれしいまさしくさがせかしく 男記 業上ハ八月
てり源氏の君ハ字妻の服なとよる芝してなとも二十月なりけり
此にも一文の内世衣とそまそく餘衣忌ぐまてさまうりてのつゐの
綾なと忌まろて平絹と忌ます
今ハとて 細 業上のらくめそて
らしやまとそんといへり
こゝさのいゐ着 細 家まそ
としうよ六条院とらん之
より何かりつめ白宮
六条なり

若なる いとつくりされば あ后の
よまくらのまよ かりいえもへまつり
りましてこるさの着着しく
花どもしこ路らなくべとさよるかくして
はなし 宮ハ紅の袴すへまなく 躍ぞ
あまそうりふつくりがかくしれの内衣
あくらうしふどしこのもようらめ
さくるかくしてもおかつとしのどやかなる

あまへみる 哢 さめ清
気細 詹ざるも画女の人
の浅ふきどとりてよ詠
のくし

まぎれなくよそなひすて、ひとりくさま思
ひすれたるも、いとうしやましくあぶえる
つる女のけんざしみすれ、どられかうしく見れ
しらぬさうしおものられ乃名ぞ人しくてい
と面白く見れど、まよろつもせられし
人多くて、花の名をさかしくのこえれさう
ずと伝のれうりみとくてみうへずりられ
とのおて、らいのま人のやまぶきこそ代世
まえしぬ花のさ面られ、みさの比佃ささ
あどよたのさうらぶどいとぎてさりを
ず花あやおしん、花やうよみぞきそくし
きうしこいいと面白さりのよろんありう。

細 時花と次の詠歌よおさ世まうし
細 詳まよくし
源の詞
哢 六条院南のおとゝ紫上住給ひし所

花やうまあきらつくしき
師 山吹の名取也洗人詞
あとんらうけあるうし
いへり、其一条のさんまんをつけてくてん作るすめ
ありまし

傅しんなうき 細 或ひと書
よ昔のことまを白くえうん
なん人の紀をそ恵うさ
若よい去りし 細 女三宮の
御をとすえ何とよすくの花
へど物かひとおしとぞる
石原の舞まよさうて出る
かとく 定けと云若よ八書
ここよそられだ也きそて
とく首物也をとあし 河
師 其当き若ま八とは女
三宮の思ひ下らくされも
物思ひとあ一しの心を
なきけとつ一くやうより
きうる給ふうるへし
そのつしけるしてでも
細 是よつけても怨みあ
るまと云おあらく一上宮
ぞとよさぶふと思ひし
しのまかりしとく
和泉式部と云ひてそとまその
しくと云ひ出くまる世の
其さくもがあしとふるん
と思ふし

うへしく人あさき去しをもく花ぐ月まそしつれ
しうと白ひとる[illegible]さるしき姿よ侍れとの
給ひいくよ若み良去りしみよぶりおく
おし給をゝしをてをおれんくくりし比る
きうくまつけてをぞのくしと花さうてまし
ありてんりしとさふよいもぶ嫁しうてたを
やまつしゝすいろけろうりし月どしう
の御あうさ返とゆぞちすようしぞやおうし
とかりし出るよいおけそのあうちの此ちなど
くきらくらくしくとめかへ世わらし
さうど面りそてすしくの紫乃ひ比りひづ
けしれゆくよれいのすゝどのりろさな

源の詞
まつけてかまつるの云らゝささにつけてわとうり
紫上のおさなき時の事
紫上の若くらのうけんよりあらし

せ給へなるよしなれば
抄 源氏にしたがひ給ひしを
れたゐ給ひしのむつび浅
まなくて人すれども
せうとたちかくさ給
しきこと

のとくにまじりしせうとより
あはれに侍る人侍れ
ばなり

かくこそあれいぞめりとのゝしり夕霧の
宿人めどくしくおはしき侍すればやうらく
おくしの御方まいりてまくらぞへしらくさしま
のぞき給ひぬよせいし給ふせうとすればら
せうとうれど御侍らうけとひとしつかへ
りそつけきぶ侍うけ人をはまいりうれと
こ給ひをつけてはみな御をうらへあしく
まそゆへうしとそりてすしまうりしうと
せうしくべらずきふもせりうげよてひし
うちあしきのとまされば今てすずさび
べきんぞといくらくべうつとすく
はのしやりよ上書物語すで給へ人とおはれ

ことはいりそてくり
あふしみへしらうぞの
ことをしらく

大のこの世まつけて
細 波摩くより給ふと
すり君かりし時よ命を
とうらくもひしく

おうらどもことくままてつ
へく 河漢は程のことど
おまくうつくさじ波よは
いうどろうしもうべく

とうろうとめんばいとしまうりうべきことく
いかしへよりせとひえてまべくいうるる
こみもこの世にかとしまうべきこしる
くしうろうひとせしよ大くとの世まつ
けく身のいうぐしまうられめぐりしは
かひるとしせさ御ろくさ御はよもめぐりし
さうまだ命ともうつし程つくく雅山の末
よろうつくらんよてしたかうさりあり御
じうるん忠すりしどもあの世よ今はり
ぎりの御ともうくさ身めそしもおりま
じしさ御らしせりうくつくひそ いまく
でもうしてけるぞうこうそうりとう

執心

いかにぞやうくは侍らん
に鉄ラチ連鉄の心也
師説心と也なれまするは静
よ思案なくして然とも
いにしへのふるしきこと
花鳥ふんにもそれて然
しきの給ひに随世なると
すり給ふ通しなめしかふ

きこしめしさして一たびの御かへりさるは（紫上のみ一つのやうにはのたまふなり）
のちはの給はせど笑ひてうち御のくとかり（細紫上）
よろづにつけていとかしこきなりて大かた（花明紫上の事也）
との人めよそふべきかりげなきさま（のまへ差ぐ）（世の人めの事也）
よろこびの御うしろめたき事なからむ
かう様にすいりていたうやくなきも地ぶ（紫上の御事を云）
しなさん事のあるべきこそはかり（三）（弘徽殿の御方の事ハいふまでもなし）
てうぐしきりにしされどもしむ
出そおほくなるこしるしと侍らたりと笑
らかどもみづからさきよ侍らんやすきつる（花散里心をおもひて世の中とすゝむる也）
よもうそこそさ世給ふさうすみ侍らんし
さやうしれ侍りてもえいふしへのさかり

まやうあれどくにうか
よにゆめのがしたく起
そへきこえたにとどかわざえ
花山院殿ハ弘徽殿の落
為実ありどかれさせ給て
給ふ侍ども御かり花山よりつ
せうひらき御殿よ八落世
よみへにせ給ふくあるやう
なる所山うゆへ山をもあそ
しと通ふしとうつりやさく
さうおもへるち御細用之

さすてものりふんかく
とうしく孟源の御君々や
うつらさうあう八庭御中とも
ろあゆし一清くおもしろう
よ八片かうさそれとそうん
らんなく面白き出やう
へ御く

どと実侍ふよ付てえくふよ地くめうれいふ
おさなく三世と根ると思ふのりくいてすう人をおもひさえ
しりようふぬしありて世といふふつるそよ
なからとうそれハなすくまかうさことしてそな
とあはの地かりのよめさせみそ衣さらな（細思惟えんさるまで）
どうもやとるひゝせめひゆくしてよきこきる（細紫上の君あきく）
とうえつきこ顔の様よえきすうきさせきこ御りん（明石中宮殿の君の御給よりつせ）
まそふんそこれかうく侍らんしそれやすくも
うれしくも侍らうべかれなといと地しるびて
哭てさうなしれいとめやかもしさまで出の（細源の詞也）
どめん心かあさこしそあさきよとうりめぐ
それまでのあそ首よりのさとめくしく
あじりくり御給中よ哀こさいのえめのく（哭秀雲三月よ山崩）

しかれとも
詠人の様しらるゝ　細 作者乃
さし――――

あつしくらりまさく
細 此歌のすゝみと道ふし
くいどさるものゝなり
作よりよくらせしとか
物のあはれいとりつまらそ
さよ妹せの中みかくみなよ
らいしのらく　お鷹重
の歌ぞとかく世りへつき
ねさきまれでいう見とく
さくてのまて

世をくり志書あるんぞくれのいろ世ぞそともま
こよんあしかゝく世わし。細 これいへりくこ
の世よつけておりしうり。ぬし様と世さ
あくまりこすり志てさうらちめの
あはれさと人よりくよま世わかしるすり。
まがしくとりよらんらしみしと物のま哀
いうしぬまざ也。細 としへぬろんまとくれて
らみ世さめんらさあく忘れてかれもおそく
細 いうせの本とらり　うら中のうさしさのそあはおしは世さ
あさき行よりまあへしてそあさ海わる
とりふ老めらすゝ志の世よしら捨られて
もり男と人の男とそつくらし

あらせりひめらくきぐさ
くさふすのおさりし
そ　作よら何のくさる
つけく忘れてまさぬ
のさふよりおしさのおさ
うしぬさいふらく

おくくも　細 愿ふよせさ
つき主用のくゝよるれがく
孟源の此名ゑへのあらいづく
とうりの世るそ世とく

さればんぐくさまよみ人へとべていの哀もし
その不儀教とのあま何と
ゆへおりことども。おりしさぬらつも。ひあ
う志めぐしきそかさぐくきそへしのおさくら
ぞかるよみ人わりわるまさで。秋ふる海
で。眞今の此飛錯よらくても　細
秋とし覚しなりし。りつり絲と。女と物
字義略してみべし
哀よさみべし。あるれはんみとおやしく
と海よわるゆきと覚しあくさそくと
まこ例の法とそるひよ。秋中よ幽てぞ
ひりのあまりいとりそをよりつ
絡つとめそた文まり絡よ　源
あくくも海りみしされらの世といづく

身のうへ　細川幽斎の縁身
となりしとかれて源氏乃
歌をこのみ世をのかれ出
ふかく
鷹がみし　細　岩上の後久
源の詠歌をとりんろう
のみかきとくし師は幽斎
の五十かく、かりがみかしは
かりの世をてしわる其細
のさくりめくぞして勝
鷹をよくしへたるもく又
一條廿一家白変なで岩
のせしそ久とらふ歌
るかなろのもえしとい
栄へらせまてやう
つりし翁のとはその別
から好源氏の幽斎まで
かひさ猶しとうけを
ずよえだとりうや

とつるのところよるはねよよしへの内わらさ
海しらめしげまりしらくいとらくあ
らねさ海よかりかれさらば家のらぐ
あしさるよ身の上をさしをられてるとぞ
ぐまれまふ
うりがゐし当代のくし
つりし花のかげぞさまよず、わらひう
よしあうらさ海ふとる海めきあし
ものよ笑ひしかりしと、末の世ふは
よかば世とらし分どちかくらしるや
きうさふ俊うらさのひへくたつし給る
しめまくまりしてひさかるよよらく

おとさりしてひさうさかよさく
海へのりとを気と隔くするでいかんと
[illegible]
苔衣　今日かさりしはかる
くつまくまるうてまとを
すまへらべしし人岩上をや
らの衣裳みか細しかひ
しいは宮はこつけて出
出しるめべらしく
はせむこし精進まへしよ
羽衣の　細　出家へかけて後
衣への精勝のと色衣
蝉の世へいまをしさ世く羽
衣のうそうさへ蝉の羽ぞら
とく衣のひかへ衣といべし

とけまで、ゆくまそしおそあしまらしらしかと
ては人はさしをこえしむさらきみか、え
いらてあてしきらくしたり時はやく
ふとさよらかのめさ給れくもあり昔の
れよ後よいかひかくぬよぶらくし、衣の
うくより浦衣ぞへの浦羽衣ぞとりうまをそ
苔衣さらくゝてかくふもらるあさ
あらをしてもくやとをもかね浦近し
羽衣のしきさよふうしてもとのへ蝉の世をぞ
いとくるのしさ墨の袖いとつれくてそくは
袖えかとくそらへくぐらかしけあるんりしと

紅のさしくそう翁そひ
細 脩子あつく服着のて
う脇のるこ 老 紅のそう
まゐら郎のをひさろく
萱草色く服着の
風流あるく中将の君けよ
くどうらるくさ若服
とも一巷のうらろく

てらや志ろのあさ風みじえしや女房
をくつまさうくしのしん里よ也びろく
生そらよしるぎの鐘中将のぞゐ人ぐしれ
りそよろてね志てろとわゆをかつてここ
まれハいときやうよかしこさ風しも
ろさわかりさらうつきさるやうよゆか
ひさう月そくしてものうけかぐくれ
よろこのかりるをいてかくしげや紅の
きばとさうけそひさう風くらんざう
いろのひとくいとゝさうびるてよふろうきな
じやうつしうれてわれそしもらしろたる
もめさむくしうるどよくひへさ

うけるくさまよあうひとうくつしよ参さうり
なるとゝりのひているよとろやこれなと
そうよすれよされとのなる人ハ
さとてそハみるろくのあつよ久手まる鈴そ
のうこしよるへとよすくしくらんしくひてる
わけよといさちしらそ
大いさハおひそそくし世ろれども あのひ
くるしとやつえどうもろぐき あ ひらうづう
ハ(いくつ)しそるのくあぬそしさわれハ月風く
どうすめくらし絵うり月のこうなく
さうぐくしこえん十よ日の月きれやうよ
さく出うり雲つうの影づくしされ大将の

のみなとも思ひやらるゝ哉　定家卿の鴨葉
抄ミしらんひの名の下にくさりや師のもとへの此のうち何海はさ哉くちさしてしと之
と細流抄紙ぶ鴨葉抄の後と同まくらかを歌にも及ばざる也夢ニ逢てはなてぬ
たゝさい　細中将居ひくりまへあをへひらくみをとりうるへしとし之罷と橘まよせ
より師つきよりもへこうとんをきは橘とよいで罷の名をとりたりおふるのあり
八條わりのうくのらく

ちゞ絵合にせる　細　絵で
よ給へてまゝ歌を給く
なくへね花橘よな歌ら
ませとみしせる給ふさ
也く句

まし　とゝ河声　口　欽之
殘燈　壁　欺　蕭く暗
雨打窓声　細用く　三上
の細よ河数も咲まとへ
しては河の川をとつ

青葉へまゝしひ給花橘の月ぐげまい
ときはやうよろつりもせぬ風も門
しられは此世をすてしと門声もきこえん
まてるしはしのよ。他にまふ出ぬ　月の比
余気識よ面白し
のこしれはしわやみふろく沼ろくろ
こゝろふ花よそひくぐまし吹風よ
まろも吹けるして宿しくきら
ゆるよみよとうつ声ることめらしら
ねかくしさらずまくるも

る絵様あり　細
いもがきねよ　細　此葉上よ
ゆかせぬりぞりて
のらしひいらうしくふまく
いうもしき所をいりり海
ねよりてしうるせぐや

みやいもが垣ねよとしくすせ海かり
きれし名あはひくりそてつくしよふふえ
あしとすけまどおやしうさらづくし
くまそそあれおかさ山径をんおもく
て身とあうらしうんばこよあうこゝろ
こあべきことぞ如ありるとのあまて女房ら
よろさりの名ずまつうせよ知らくしめ
さんと人らくしきおどかりあどの給な
ふはなぬともきめ絵ふ気さのつきせ
ぞんらうしわれいがくのゑ思ひしれ
まどいかとくるひふとれんもちかし給はん
ことまくやとまそうの絵。凪のきよこし

あらうしとられうる極楽
の曼陀羅　阿弥陀のせん
ぞうさんのさめに故和
漢の先蹤ある所以芸上
とらまうしとられうくべく。
当麻の中将姫のあつり
化女来りて蓮の糸にて
極楽のまんだらを織り
うけおど給ふ　略す
そうのごとく　細　夕暮乃
但曼陀羅経などのうち
と芸上しくしきとどき給

へだ安しくしうしらやて
きりざきられしく法師く
うのまよつてえたう所と
まくえるべし　同
それならまあすらば
細　源の但芸上まうざうらば
いつさきにも御子ハさきる
し源の着り方つうしの着
世うちらつらく
余みなきくんて　舞久
ちくまたるを子まも流る
すとも

[illegible]

いゝまをこりてり　細いつかん
のおりさうへで浄るいり
まをこりてり右声人まをく
吴　叢の詞まいよくくもの結
おめふとりやまよりては
まりてそてりとりふうをとひ
そりかく
まこんとそのぶあるしひの
師よゝんゑ儀ま立知らむく
ぎるのゝしくさあうふくかく
あしきうんうそ又月教
ども浄教しりて。典ふ
ふ霄の山しくさめいあを
さとまいて名らゝや
浄るりさくさま　細　元とい
盛上とある　盃業まま
このらしとアセと郷まま
夕のりひけらく

まさるもいゝまをこりてりとゆへにゆずる
らむそ　源
かまさんと恋の水つ霄の浄教まめれて
やまらつ山浄るりとそいひてまうぎあう艶
結志ね
浄るり・ままままへそてるん教への名れら
戒も今ぞさうしく・女房あげ比めらくふ
あい川めされせとくめ川た給のかいやうそ
れものぬまきうつんひ結さびしさ流ひと
ほらねの山ぐらしれど・浄ぐらやうまさ
みんひすの孫おなせしまいつとげと孫
るうし・結かしのわくりのいくら

いくよおりやうり　ゆりくをりしさぞ
まきさりにゆのさう人の身にいふ
おりりの流るつらん師　張長恨哥
佛よ池蓮夏開宮槐秋落
とそうらうて・池の蓮とよん
あてしも葉をおひの周まさ
色え細花看るを君子後花
汚海の引きさるよ不和慮
めり法照禅師五会讃
あ一を池中華尽満華
を懸是往生人
花　吴　蓮の上乃露と見
るまひきり手おあるべき
まきまひきくいつまあかわらら
と起りしおつすまべし・おく
盃如洲
圓ふらしの声　細　蝉の声をを
さして鳴のやや衰とおそ
りん蔵鳴多らけのやま
くるそしことゆるきひ
出まふまりべし・桜乃さ
え日上とまる秋のやや衰
と思りんの山西中し　吴同義
師　秋のやちとらふまらんを

くるれぬあらまよつけて・お
とも浄るりらいとあつさは・すり
みくたあがめ結よ・池の蓮乃さう
らは結よいつま浄るりのかる
あくよおわれぐまくてつく
結よ田と葉あかり・目ぐらし
やるまよ・流家のかすぐこの
よりのきえのふよし・げふあ
まつ　源
つれぐとわがるさくくれ家
ぐまいき虫の声くれ・蛍のい
ちぶも・夕風よ浄らうとんで

夕殿蛍飛思悄然 孤燈挑尽未成眠

水暗蛍知夜

蒹葭

七夕のあふせは雲のよそに見て 細

仲別の

こともかゝるすぢにのみくちなれ給へり

源 よるをしる蛍をみてもかなしきは時ぞ

ともなきおもひなりけり。七月七日も。例にかはりた

ることおほく。御あそびなどもし給はで。

つれ〴〵にながめくらし給て。星合見る

人もなし。まだ夜ぶかう一ところおき給ひて。

つまどおしあけ給へるに。前栽の露

いとしげく。わた殿の戸よりとほりてみわ

たさるれば。出給ひて

源 七夕のあふせは雲のよそにみてわかれの

庭に露ぞおきそふ。風のおとさへたゞならず

なりゆくころしも。御法事のいとなみにて。

ついたちごろはまぎらはしげなり。

今まで経にける月日よとおぼすにも。

あきれて明しくらし給ふ。御正日には

上下の人々みないもゐして。かの曼陀羅

などけふぞ供養ぜさせ給ふ。例の宵の

御行に。御手水まゐらする中将の君の

扇に

中将 君恋ふる涙はきはもなき物をけふをば

なにのはてといふらんとかきつけたるを

とりてみ給ひて

またおもひつらく
事可勘之 菊に霜を
いたゞかせたるのよし一条兼良
公の注說く
りうくわにはなさかす菊の
仰ぐる名よしとて家の定
んなれどえさせ給へとりて
ともしまに[illegible]
とまれるとかしもにかきを
菊の家にかへりたらん
かくひかけきや 俊成
かくしかし 細 紫衣月より
と問答を論じうつく
細 ひとつなれしまうつき
大雲など 細 鷹をまねて
就行自在なるすべき幻士ハ
幻術の士は法をもうて幻士ハ
つね給ふ所かうはたすかは
え給う幻術なる仍術者
ともかうしらんしお長根
なる 兼亮 鶴田束の疾不入
公の

孟 源の注在まく 秋 秋男八まず御ハうま風ハおかまかねく
人ちかう秋月まで参まで地ゆけじおち坊の
風かちかうしくまさへまふ九月まかそて九月
わく男ひまろくを流らんじて
源 かつまも上をまるしきみ起つ七もひ
とりぬりしまかる秋の紅紫衣月とえうさ
もまかれどかうかいとをずありまひらく
夕ぐ暮の空乃気色るどうえをいそねらく
ろ頂もふるよ おらしうひらくらはえ
細 つくと紀らうまじ
そ 雲ねどまさる鷹のつでさもらしやま
しくまりしれまふ
源 大雲ぞ とうふま得ろ美ふこんえしとね
公のもと来ふがひよふかよふしまつけてしも海

とらふくじ
きれぞのくまにすへて地かやきてぬ節る
どひのと世中そとそうかうくいろあらし
げゆかこもかゝねじくわしまぶち扇よしまそて
源へ 夕霧へ 細 まうしく御みむし
まうりまつらかを泊しみくふくらりいく 二二人のかうし雲井勝之
うけらしき海也流されうの郭中にて藩人 細 雲井房の見せ
かねるなどとにめかくわ絆をりのすゞきどとも
細 小蔀 青摺 山藍摺く
きよげまめやかとこそ思われらつゞきかく 夕暮の君
うつきつくりかうまきりまふぞふしとき
生を来てうしつくそく
源のと
げるうき海どもとそのみよいふうしへおやうし
細 源氏の大節まえやらまひしうまうでく 孟 本らうかどもの犯生
るもうこ日かげのゑのわかゞまずがまぬがしる
へとてもかく
べし
源
主人ハこのあかうまいぞく乞ふ日かげを

どきふらく 花 十一月中の卯
の日 新嘗会辰日豊明(トヨノアカリ)
節会(セチヱ)まハ山藍(ヤマアイ)してすれる
小忌ころも衣を着る事なし
一代まさ一度の大嘗会かとも
其は仰 大嘗会の役者ばかり
おかぎりの君達まさふ
ま郭中なる藩人は禁るまで
おうなり
主人ハ 細 日蔭のかつらた
しぜくくいのうりいもうぞ月
日の影まさまいとうぞうまく

異 月漢ハうつくましせて
ゆゝし給ひてけうとく
師ハぞくなふトいふらん
また給ふ面をとらんとや
せとまうりすぐさ 細 倦の
段よ隨遂しまうすす
宇治おむ本書にまなりて
みてうり花 浮舟 蜻蛉
のうす山ね山ちもみくり

やれハおし やれをかしとも
ねぶんはえてかぞはる
くおもくともれまるとも
れり 河

みつせのとくを
とおりひる侍をもずさ
の給ぞく ゝせの都人字り
まう
細 うひる

ちくぞうしつられしうしよへてものひ
まうしつれハ今ハしせまるまじほどう
孟 南年ハうしせ此年世年まむ
きく芙しおうつまよ義ゐうしつるせさぞ
やうくまうべさうしくも、れんのうまぬが
河 遁世の用をさし
しつゞけぞしまうゝねんぞゆも、旧かくり
つけくりのまひあぢしゆぞかつくちて、今ゐ
ん限しかうし給ひるひどしらみさふみんで
へれ旧いとげまあべき、気達しとまうまくに
孟 人でのさく
とこの書りもとこゐ旧そくうゆしぬく
くぞうりなし、落とまうりてくこえまるべさん
のれ文どもと、やれハおしとゆがりされりつや、
まうしづゝのうし給ひつとよりのつゐぞよ

けらんじつけで、やうしせまひあぢくするまの
さ海のまろりひ、何ぞうしうりなりまひおりも
又こ
りつ浮まよのれまとうりへてくよゆひおぢせ
細 世人の中よ給く
てぞまさけうぞうつしちとさきまひおりつく
浮の中ひわ中の世をとかくまつく
すれど、ひうしうがまりり世のつくゆが
むるよ、そぐい海のゐつりゆうもとくつさあぢ、
ぞばあふとせのつさよまぞりべうせる給
河 遁世のゆちハみ人の抱ともこん分みむくら
さぞとあらめべくさんしゆがもはりゐるく
てぞしうぬんでニ三人ぞらゆまへ
そやうを給、いとうしらね給のしあ
そ利とねつそも
まうしさ物おとりうう
飛 術双字
てぶれ、おゐしんの給とうらハ義ゐうぞ、
まうていそぐうさくし、それとさとま

此洞のみなもと

酒涙ニ論シ倶ニ悲ミ且吟ス黄
壌誰知我ヲ白頭独念君ヲ
唯将老年ノ涙ヲ一灑故人
文 香天元ゟ 元稹集序

みぞの山　細 わらくし事始
之師山をこゆるとしふ縁
ま語とさゝてもとし
和十義經文ニ醍天山门集ル
惡神ヲ云
ば世あがし　孟 法師への夕
し師ゆく奈なく別れ
る事をふあらそい
つる詞なるべし

われぬまでしみかつる此洞のみなもとより
なかれそふ我人をあはれみしけるとぞ
すゞべきがかくてらひゞてもしるまけ
世べよしやつきまで
源 みぞの山鐵ごしん人をもてなし後を
ろくもれまどふられまふ梅人でてま
酒あてえひききひろげねどもれとりのく
あらまくむまひとるもてしどく此世
おがしき…ぬれまいの目ど我いと
じと峯ろ…ひのあくめなえの紫
げよそのおりらもさきあくぬるする
さやしんしるあしいとらそいまで

りき法師　細 くさかり
めでし師ゆおび宮井の
とふされ人の名札標去
るし此文どもとやさ給
名ス行し
内佛名もとし　河 丈仁天皇
宝亀五年始之ヲ　是ヲ見官東
事類ニ佛名經記ニ並札一切
十方三世諸佛ヲ三塗苦息国
豊民安ニ云く
よくわやるのてあく
河 錫杖經曰錫杖亦名智
杖彰顕聖智ヲ也 河 佛名
夜 初日 後夜 御導師著
礼盤唱佛名畢錫杖又
第三夜錫杖後蔵人受ヲ
取内侍出綿ヲ被於導師
第ヨ借導 細
行まなりさき 佛名の導師

のほころびまでひも。細 めくしくし
めぐされ…くもゝ給そでこゆやるまゝ
さすつるさそらくさま
ほ りきつめてころもひさししかるよれ
あびし雲ぬの煙をとまれど…さけさせ給
てられやう世絡河れ名もこしうり
まてそむとかをはりや。当ちもつと
ま錫杖のこゑくるびあられまかさまり
もゝ悲なかかきこ給ひねふも給のこく
給りんこしころうつう雲いつうふり
てはめうま河まりまるみ。導師のゆるり
ふど。かや人まめてさるあさるしつねの

の源氏乃御まをおもふる心なり 師くるゝ法會なとを終ゑてとる事は人達給之
こゝ月なとつゝみのさかつきなとも 花 抄に中佛名の第二夜に柏梨の勧盃といふ事あり
首尼近中将和気某以摂津國柏梨勧盃寄尼近府官人の酒料これそさかつき是なるへし
仏名の夜尼近府よりて勧盃のことあるへし
録なとも給へし
花延喜十九年佛名導師
栗晴律師賜御衲古
延天暦四年仏名導師
海藏に三礼之間自盧
中給御衣
しかれはやう／＼ 細 白頭ヲ
良礼佛名經のみあり

作法よりもさしわかせ給て。ことに
禄なとたまはす。年比ひさしく参りおほやけに
もつかうまつりて。御らんじなれたる御 冷泉院也
導師のかしらはやう／＼色かはりて
さふらふもあはれにおぼさる。例の宮たち上
達部などあまたまいり給へり。梅の花のわ
づかにけしきばみはじめて。雪にもてはや
されたるほどをかしきを。御遊びなども有
ぬべけれど。猶ことしまでは物のねもむせ 細 園忌さあれども
びぬべき心ちし給へば。時によりたる物打誦 細 朗詠るべし

無世のかなしむべきさま花よ
孟 導師の年来源氏と語る
ふるく師弟の間にて御者
かなしきをおもふもわかり 玄師は雪と
ゆきもふりしは雪ふりつゝ
しかれは白髪も色かはりて
といへる首尾なり
まの日まて 細 此頃えこそ
の給へり今日雅て給
様の心をかしくし御導師
師は御前の盃のみにふたへ
かた人ひの御師としかふまに
語りかはりませば 細
かうかう双紙あらし
ぬやうなんとなとらう
ごとく 師あやらさんのしるし
やしびのごとく物のさと

じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや導 師が盃給はれてのついで
師のさかづきのついでに
春までの命もしらず雪のうちに 源
色づく梅をけふかざしてん。御かへし 細 今日を六翳のかざし
千世の春みるべき花といのりおきて 導師
わが身ぞ雪とともにふりぬる。人々おほく 紫式部也
よみおきたれどもらしつ。その日ぞ出給へる。 源氏の
御かたち昔の御光にも又多く添ひてあり
がたくめでたく見え給ふを。この古りぬるよはひの
ひの僧は。あいなう涙もとどめざりけり。年 孟 源の
暮ぬとおぼすも心ぼそきに。若宮の 細 白き
なやらはんに。音たかゝるべき事。何わざ

とたくいまうへ。紅葉賀
巻に藤壺 河 業平朝
臣の六歌仙のくわしくは
まかりしさせぬぞりりの
あるまふうつぐらして
まうしさしされがちうう
じおまふまく
拙者ふとし 河 如きふとう
月日もおしみぬまれとし
も今ふまくてぬとりうく
酒古亭 穀忠新 上の句
もまくし開へ、
つゐてまりの 細 隆の新几今
身ぢうりあらざしくそ
開きくあうし 河 古今院
続几のくうれ今年世を
さうぬふづきる御よく
くふま縦横なつくれかく

よをすせんとぞうつまめりきぬにも。おかしれ
れあらき御代ぞぞくしんこしらへ川なり
むのびかし
拙者ふともまうす月日もおしみぬかよらし
と我世もかくやつきぬらんつちのちど
のくしつねもりくしきべくしとどくく
させおふくさらぬ店の中ひとそくりのゝゑ
あくのろくどもるがくよるあう咲かしまうう
けそとど